第２言語語彙研究における語彙習得研究

―― 理論およびモデルの構築を目指して ――

田　頭　憲　二
広島大学外国語教育研究センター

はじめに

1980年代以前，語彙研究は第２言語習得（Second Language Acquisition; 以下 SLA とする）研究分野において比較的関心が払われていない研究領域であった。この中でも，Meara（1980）は80年代以前の語彙研究について，「言語学習において無視されてきた側面（p.221）」であると言及し，語彙研究の重要性を指摘している。この後，多くの語彙研究が第2言語語彙研究分野においてなされ，数多くの教育的，研究的な知見が得られている一方で，現在新たな大きい研究上の問題点が挙げられる。それは，1980年代以降における語彙研究の爆発的な研究数の増加にもかかわらず，未だ多くの研究が記述的な研究（descriptive research）に留まり，説明的な理論またはモデルに基づいた研究（explanatory, model-based research）を欠いた状態であるということである（Meara, 1997, 2002)。そのため，現在，第２言語語彙研究においては，新たな研究課題の設定に必要な理論や，多くの研究結果を統合するための理論的枠組みが存在していない（Meara, 1996, 1997; Schmitt, 1995)。

そこで，本論文においては，他の関連分野（心理学やバイリンガル研究）において，近年確立をされつつある理論やモデルの概観をおこない，それらのアプローチの違いを指摘する。その後，第２言語語彙研究への応用可能性について，応用例を提示することにより今後の語彙研究分野に対する示唆を導くこととする。そして，今後，語彙研究が語彙習得研究へと発展するためにも理論やモデル構築の必要性があることを指摘する。

１．語彙研究における理論およびモデルの必要性

SLA における理論の概論をおこなった VanPatten and Williams（2007）は理論とモデルを区別する必要性を主張している。彼らによると，理論はある現象を，説明，予測し，一般化された現象を統合するものであり，モデルはある現象の過程を記述するものであるとしている。これらを踏まえた場合，現在までの語彙研究においては，語彙習得という現象を，説明・予測するための理論，そして記述するためのモデル，更には理論から派生する仮説が無い状態といえる。そのため，研究結果に対する理論的な説明が無いままに多くの研究がなされているため，研究により明らかとなった結果が統合されないままに断片的な研究結果のみが蓄積されている。さらには，その結果より現象を予測するための新たな仮説が生み出されていないばかりか，現象そのものの過程が明らかとなっていない。このような状況では，包括的な第２言語語彙習得についての研究がなされていないといえよう。

例えば，これまでの語彙研究の場合，その多くが最も効果的な教授法を求め教授法効果の比較をおこなう傾向にある。その際には，異なった教授法（教授法Ａと教授法Ｂ）を２群に対しておこない，その効果を直後テスト，保持テスト（約１週間），遅延テスト（１週間以上）において語の保持率を調べることで，その教授法の効果について検証をおこなっている。このような現在

の語彙研究を，Meara（1997）は，以下のように述べている。

> If you look at the bulk of the research that was being carried out in the 1990s, it does not differ greatly from the type of research that was published in the 1980s. Indeed it is even possible to find abstracts from research in the 1920s and 1930s which would not look out of place in a modern journal: the questions are often the same, the research methodology often identical. (Meara, 1997, pp.110-111)

つまり，現在の語彙研究は研究結果に対する記述はおこなっているものの，それらを統合する理論がないために，継続する研究課題を生産しておらず非生産的であり，SLA 研究の他の分野に比べ発展をしていない。今後，言語教授場面において語彙指導を効果的におこなうためにも，また，第２言語語彙研究が更なる発展をしていくためにも，まずは説明的な理論や習得過程についてのモデル構築の必要性があると言える。特に，その際に以下の３つの視点が必要となる。

(1) 特定の教授法にはどのような効果があるのか（理論による予測）
(2) なぜ，ある特定の教授法が一方の教授法に比べ効果的であるのか（理論による説明）
(3) L2語彙習得過程において学習者の頭の中でどのようなことが起こっているのか（モデル）

第１に，得られた研究結果についてある特定の理論に基づいて説明をおこなう研究が望まれる。現在の多くの研究においては，ある教授法Ａを教授法Ｂと比較し一定期間後における学習者の記憶成績が良い場合においても，基づいた理論やモデルがないために，なぜそのような結果になったのかという考察ができない。そのため，教授法Ａがもう一方の教授法Ｂに比べて効果的であるという断片的な情報を得ることができても，継続する研究においては教授法Ｂと教授法Ｃとの比較のように他の教授法との比較が繰り返されることとなり，そこから新たな研究課題が創作されず，その後の研究に応用することがとても困難である。４半世紀以上前に，Nation（1982）が「あるテクニックが学習者の学習を助け，他のテクニックに比べてより効率的であるということを知るだけでは十分ではない。私たちが必要としているのはなぜかということである（p.32)」と指摘をしているように，研究結果に対する理論的な説明が求められる。

また，学習者の語彙習得においてどのような過程が存在をしているのかを示す必要がある。現在では，学習者に与える教授法と得られた結果との間については，何も解明がなされていない。これまで，第２言語語彙研究分野において，語彙の習得過程を明らかにすることは重要であるにもかかわらず，どのように語彙が習得されるのかという発達の観点が長い間解明されようとされてきていない（Haastrup & Henriksen, 2001)。Haastrup and Henriksen（2001）は，その中でも SLA 研究における統語の発達順序研究のように，語彙研究においても同様に学習者の語彙習得における発達過程に焦点を当てる必要性を指摘している。語彙習得が起こる場合，学習者の頭の中の心内辞書においてその構成に変容が見られ，その変容を発達過程と捉えることができる。そのため，学習者の心内辞書において，どのような変容が起こっているのかを明らかとする必要がある。

このような状況において，実際の教授場面において，語彙の学習後にどのような記憶の側面よりの制約を受けるのか，そして心内辞書内に L2語彙項目がどのように記憶されるのか，その後，

どのような過程を経て学習者の心内辞書へと統合されるのかについて明らかとする必要がある。

そこで，次に，上記の３点に示唆を与える関連分野（特に心理学とバイリンガル研究）において提案されている理論およびモデルの概観をおこなうこととする。特に，理論的な説明および予測に関しては心理学からの知見，語彙の習得過程についてはバイリンガル研究からの知見が有益となる。

2．心理学からの理論

語彙の習得は，心理学的に記述をおこなった場合，「単語のもつ形態情報，音韻情報，意味情報を相互に結びつけて記憶（符号化，貯蔵，検索）をすること（松見，邱，桑原，2006，p.162）」と定義される。つまり，学習者は目標語を何らかの形で記憶へと記銘し，それを記憶の中に保持をおこない，テスト等においては記憶の中からその語を想起することとなる（図１参照）。

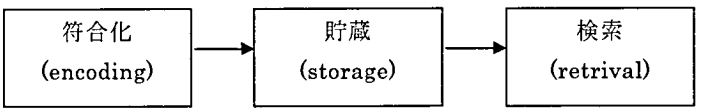

図１　記憶の３段階

この中でも，教授介入をおこなった後に行われる語彙学習という現象に対し，どのように記憶へと語の記銘を学習者がおこなっているのかという点において，その研究結果の多くを心理学的知見から説明することが可能である。特に，この記憶段階の符合化と貯蔵の過程に焦点を当て，第２言語語彙の習得に関して知見を示してくれるものが以下の３つの理論である。符号化についてはPaivioによるバイリンガル二重符号化説（Bilingual Dual Coading Theory: Paivio & Desroshers, 1980），Craik and Lockhartによる処理水準説（Level of Processing Theory: Craik & Lockhart, 1972），そして，符号化と検索の関係については転移適切性処理（Transfer Appropriate Processing Theory: Morris, Bransford & Franks, 1977）がある。

2.1. バイリンガル二重符号化説

バイリンガル二重符号化説（Bilingual Dual Coding Theory）は，Paivio & Desroshers（1980）により主張されている理論である。この理論においては，それぞれの言語に関する記憶表象システムとイメージに関する非言語的な記憶表象システムの２つの異なるシステムを想定し，これらのシステムがそれぞれに独立，または部分的に相互に結合して機能することを仮定している（Paivio & Desrochers, 1980）。言語システムにおいては音声や文字などの言語情報に関する記憶表象を示し，一方，イメージ・システムにおいては非言語のイメージを中心とした記憶表象を示している（図２参照）。

この理論では，言語システムのみを用いた学習に比べ，言語システムとイメージ・システムの両方を用いた学習の場合の方が，二重に符号化がなされるため加算的に記憶の保持率が高まると主張されている（加算的効果：additive effects）。また，この理論は，符合化におけるイメージ表象システム内のイマジェンの活性化を仮定しており，言語に伴うイメージが語彙学習にどのよ

うに関わるのかを説明する際に，大変有益なモデルと言える。つまり，この理論によると語彙学習においてイメージを伴う語の学習，またはイメージ教示による学習の場合の効果は，言語システムとイメージ表象システムの両方が活性化されるため二重に符号化がなされ，加算的に記憶の保持率が高まったためと説明がなされる。

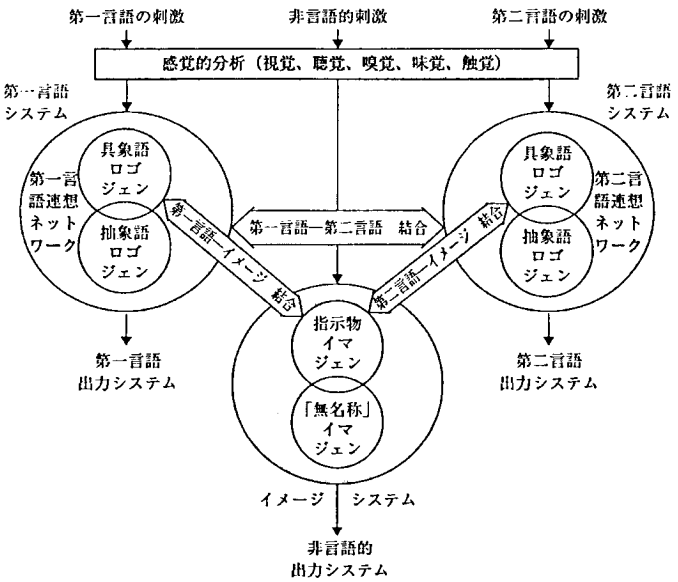

図2　バイリンガル二重符号化理論のモデル（松見，2001）

2.2. 処理水準説

二つ目の心理学的な説明理論が，Craik and Lockhart (1972) により主張される処理水準説 (the Level of Processing Theory または Depth of Processing Theory) である。この説によれば，新たな情報の長期記憶は短期記憶での保持時間の長さではなく，むしろ初期の符合化段階における処理の深さ (level of processing) に依存するとしている。そのため，情報を深く処理するほどその保持は良くなると考える。学習において入力される言語情報には，知覚的，感覚的な浅い処理から意味的な深い処理までの幾つかの水準が存在すると仮定し，深い処理がなされた情報ほど記憶の痕跡が深く形成されるため定着が良いとされている。処理水準としては，表記形態に関する形態的処理，単語の音韻に関する音韻的処理，意味や概念に関する意味的処理の３水準が仮定され，この順で深い処理がなされるに従い記憶痕跡が強くなり記憶の保持率が高くなる[1)]。

また，処理水準という考え方を補充するものとして精緻化 (elaboration: Craik & Tulving, 1975) がある。精緻化とは，符合化時に学習対象の項目に関連する既知情報を意味的，連想的に付加することで深めていく過程である。彼らは，同じ処理水準内においても，処理の集中度，多さという量的な違いによって記憶成績は異なると主張している。

2.3. 転移適切性処理

しかし，一方でこの処理水準説の予測する通り，いつも処理水準が深いほど記憶成績が高いわけではない。逆に，テストの種類によっては浅い処理の方が深い処理よりも効果的であることがある。そこで，この処理水準説を補充する形で主張されているものに，転移適切性処理（Transfer Appropriate Processing Theory: Morris, Bransford & Franks, 1977）がある。この理論では，刺激そのものの特性や符号化条件のみでなく，学習とテストの相互作用によって課題成績が決定されると主張している。符合化の際におこなわれる処理水準とは別に，検索でおこなわれるテストの種類によっても記憶成績が異なることの説明をおこない，記憶成績は符号化と検索の際における認知的処理種類の一致の度合いにより異なると主張する。つまり，テストの再生時における処理が，学習時における処理の仕方に近ければ近いほど，学習時における処理方法が学習転移をし適正に処理されるため，記憶成績が高くなるとしている。

2.4. 第２言語語彙研究への応用

上記の３つの理論を語彙研究において応用する試みが，近年なされつつある。そこで，以下にそれぞれの理論を応用した研究の概観をおこなうこととする。

バイリンガル二重符合化説の応用例

バイリンガル二重符号化理論を応用することにより絵画学習法やキーワード法といった語彙学習におけるイメージの役割（画像優位性効果：picture superiority effect）や，語自体の持つイメージ性または具象性の効果（具象性効果：concreteness effect）についての説明が可能となる。具象性効果とは，具象語が抽象語に比べ記憶成績が良い現象を指す。この理論によれば，具象語は具体的なイメージ可能な事物を示すため，言語による符合化とともにイメージによる符号化がなされるのに対し，抽象語はイメージできる具体的な対象を示していないため，言語による符合化のみがおこなわれることになる。

一方，この理論は教授法の一種であるキーワード法の効果についての説明理論として援用をされることが多い。キーワード法とは，L2語の目標語と音が類似しているL1語をキーワードとして，目標語とキーワードをイメージ媒介によって結びつける符合化方略の一つである。このキーワード法の効果については，他の教授法との比較でおこなわれることが多く，様々な研究者によりバイリンガル二重符号化理論を援用した形で実験がなされ，その有用性が検証されている（e.g, Van Hell & Candia Mahn, 1997）。

処理水準説の応用例

処理水準説の第２言語語彙研究への応用については，語彙学習の暗示的，明示的処理について議論をおこなったEllis（1995）により，語彙研究への応用可能性が示唆されている。また，実際にこの処理水準説を教授法効果に援用をする試みもなされている（e.g., Brown & Perry, 1991）。

また，Hulstijn と Laufer は，特に処理水準説の精緻化という考えを援用し，付随的語彙習得におけるかかわり度仮説（Involvement Load Hypothesis: Hulstijn & Laufer, 2001; Laufer & Hulstijn, 2001）へと発展させている。この中で，彼らは，語彙習得が起きるのはそれぞれの言語項目を学習者が深く処理したときであると主張し，付随的語彙学習において学習者に与えるタスクの種類により目標語との関わり度（involvement）が異なることに着目した。このかかわり

度仮説においては，情意的，認知的負荷により語の保持率の違いの説明をしようとする仮説であり，学習対象と学習者が深く関わることが重要であるとしている。その際，関わり度として必要度（need），探索度（search），評価（evaluation）の３つの構成概念の設定をおこない，学習者がタスク遂行のためにその目標語の必要性を感じ取り，それらの意味を学習者自らが辞書などを用いて探し，またその文脈に適した意味を同定することにより，その語との関わりを深めることが習得の度合いを決定するとしている（Laufer & Hulstijn, 2001）。

転移適切性処理の応用例

また，転移適切性処理仮説を Barcroft は第２言語語彙習得研究に応用し，処理資源種類配分モデル（Type of Processing-Resource Allocation（TOPRA）Model: Barcroft, 2002, 2004b, 2004c）を主張している。このモデルは，語彙学習の際における学習者の心的処理と学習成果の関係に着目をおこない，符号化の際に学習者が語の形式，語の意味，形式と意味のマッピングという語彙学習の異なる側面に，自らの制限のある処理資源をどのように配分をするのかという点と検索におけるテストの種類の一致により，学習成果が異なると主張する（図３参照）。

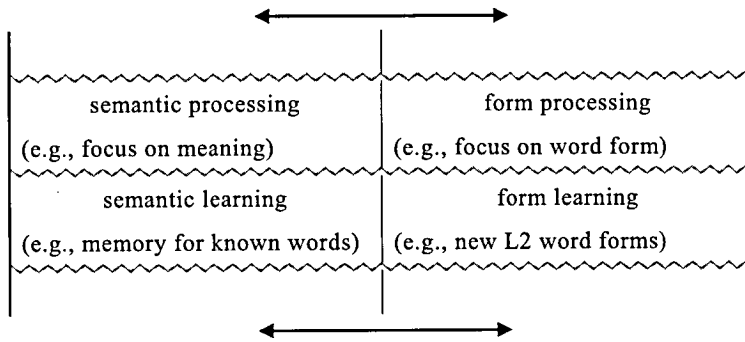

図３　TOPRA モデル（Barcroft, 2004c）

図３の両端は学習者の処理能力の幅を示し，符号化の際の学習者の心的活動の種類に応じて，２つの処理と学習を分ける中央の縦線が動くとしている。このため，符合化の際の学習者の処理，学習の種類に応じて他の側面への処理資源配分が少なくなり，トレードオフ効果（trade off）が起こる。例えば，Barcroft（2002）においては，語彙学習の意味的精緻化と体系的精緻化を比べ，処理水準説の予測する結果に反し，意味的精緻化よりも体系的精緻化が効果的であったという結果を示している。その後の研究においても，符合化において L2語の意味に焦点を当てた学習（Barcroft, 2002, 2003），または，L2語の文筆記課題（Barcroft, 2004a）は形式的側面の学習にはつながらないことを示している。このモデルは，どのような語彙の側面に焦点を当てて学習をおこない，どのようにテストをするかの組み合わせにより，その成績に違いが見られるということを示唆している点において有益である[2)]。

上記のように，心理学における３つの代表的な理論は，近年，語彙研究において少ないながらも援用され，例えば，教授法効果の説明，または新たなモデル，仮説の設定等に用いられている。

3．バイリンガル研究からのモデル

次に，どのように語彙が習得されるのかという発達の過程をモデルという形で解明する必要がある。学習者が符号化をおこなった語は，その後，記憶内において保持され貯蔵される。その際に，その語は学習者の記憶にばらばらに貯蔵されるのではなく，単語内，単語間で有機的に関連付けられて保持がなされている。これは心内辞書（mental lexicon）または語彙記憶（lexical memory）と呼ばれ，L2語彙習得がおこなわれる場合，学習者のL2心内辞書においてその構成に変容が見られ，その変容を習得過程と捉えることができる。

バイリンガル心内辞書研究においては，特に符号化ではなく，学習者の記憶の検索過程（語彙処理）を調べることによって貯蔵の構造，つまりL2心内辞書の構造を検討している[3)]。このL2語彙学習における語の保持という点では，バイリンガル研究におけるバイリンガル心内辞書研究の知見を第２言語語彙研究に応用することの意義は大きい。

そこで，以下では，現在までにバイリンガル研究において提唱されている代表的な３つのモデルの概観をおこなう。それらは，Potter, So, Von Eckardt and Feldman（1984）から発展をした改訂階層モデル（the Revised Hierarchical Model: Kroll & Stewart, 1994），そして，改訂階層モデルを補う形で提唱されている分散概念素性モデル（The Distributed Conceptual/Lexical Feature Model: Kroll & De Groot 1997），そして，第１言語研究における心内辞書を起点とし，L2心内辞書の変容に焦点を当てた心理言語学的語彙習得モデル（Pcycholinguistic Model of FL Vocabulary Acquisition: Jiang, 2000）である。

3.1. 改訂階層モデル

Krollを中心に研究がなされてきたバイリンガル心内辞書モデルに改訂階層モデル（the Revised Hierarchical Model: Kroll & Stewart, 1994）がある。このモデルでは，特にL2心内辞書とL1心内辞書，そして概念との結びつきに注目をし，どのようにこれらの表象が相互に処理されているのかを明らかにすることで，心内辞書構造の解明をすることを目的としている。

Kroll and Stewart（1994）は，L1語からL2語へと翻訳を求める場合（L1－L2方向）の方が，逆にL2語からL1語へと翻訳をする場合（L2－L1方向）よりも反応時間が長いこと（翻訳の不均衡），そして，前者には意味干渉効果が見られるが，後者には効果が見られないという研究結果から，L1－L2翻訳は概念を媒介として処理がおこなわれるが，L2－L1翻訳では概念を媒介とせず語彙連結に基づいた処理がおこなわれると主張し，翻訳方向によりその処理が異なると主張している（図４参照）。

このモデルによれば，学習者のL1が確立した後に第２言語学習を始める学習者の場合，L2語は翻訳語であるL1語の概念連結を借用することによって概念にアクセスする。よって，L2－L1翻訳は常に単語と単語の間の語彙連結によって処理され，この処理経路はその後の学習により強化される。一方，L1－L2翻訳では，L1語は母語ゆえに概念との結びつきが強いため，常に共有する概念を媒介としてなされると説明する。このモデルの主な特徴は，以下の通りである（松見，2001, 2002）。

(1) L2語彙表象はL1語彙表象に比べ小さく，
(2) 直接的な語彙連結は，L2－L1方向がL1－L2方向よりも強く，
(3) 語彙表象と概念の連結は双方向ではあるが，L1語彙表象と概念との連結の方がL2語彙表

象と概念との連結よりも強く結ばれており，

(4) L2語彙表象と概念との直接的な概念連結は，習熟度が増すにつれて形成される

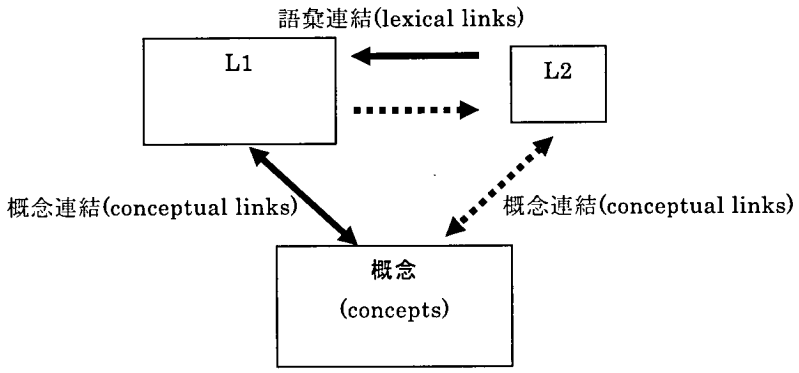

図4 改訂階層モデル[4] (Kroll & Stewart, 1994に基づく)

このモデルはバイリンガル心内辞書研究において，多くの研究によりその妥当性が検証をされており，この仮説の予測どおりL1－L2方向のみの翻訳において意味的介入の影響を受け，またL2－L1方向の翻訳がより反応時間が速いとする研究結果が導かれている（e.g., Sholl, Sankaranarayanan & Kroll, 1995; Talamas, Kroll, & Dufour, 2001)。

また，熟達度が上がるにつれてこの翻訳方向における非対称性は小さくなる（e.g., Chen, & Leung, 1989; Kroll, Michael, Tokowicz, & Dufour, 2002)。このことより，改訂階層モデルを基にバイリンガル心内辞書の発達仮説（Developmental Hypothesis）が提唱をされている。この仮説においては，L1－L2翻訳はL2熟達度が高くなるにしたがって，語彙連結に沿った処理から概念媒介に沿った処理へと処理過程が移行するとされている（e.g., Ferré, Sánchez-Casas, & Guasch, 2006)。日本人を対象に実験をおこなった川上（1994）では，プライミング効果の語彙判断課題を用いて，大学生，高校生，中学生を被験者として実験をおこなった結果，大学生には概念媒介処理が，中学生には語彙連結による処理があてはまり，高校生ではその中間的な混合処理がなされていることが分かった。この結果より，初期段階においては見られないL2心内辞書と概念の直接の結びつきが，習得が進むにつれて徐々に確立され，最終的にはL1心内辞書とほぼ同様の心内辞書構造になることが示唆されている。

3.2. 分散概念素性モデル

その後，上記の改訂階層モデルが翻訳課題による反応時間の違いに関する説明をする一方で，以下のような批判を受け，翻訳方向において処理経路が異なるという考え方に疑問をもたれるようになった（e.g., Altarriba & Mathis, 1997; De Groot, Dannenburg, & Van Hell, 1994; De Groot & Poot, 1997; Van Hell & De Groot, 1998)。

(1) Kroll and Stewart (1994) は，具象語と絵画のみを扱い，抽象語を含めた言語処理につい

て検討していない，

(2) L2－L1翻訳においても概念干渉効果が見られる，

(3) L1－L2翻訳の方が，L2－L1翻訳方向に比べて反応時間が速い，

(4) L2語と概念の概念連結は早い時期に形成される

この一貫性の見られない実験結果に関して，Kroll and De Groot（1997）は，刺激語の違い，被験者と課題の違いによると主張しており，この改訂階層モデルは制限された状況でのみ適用可能であると思われる[5)]。

これらの研究結果を語の属性により説明をおこなうのが，De Groot を中心に主張がなされる分散概念素性モデル（The Distributed Conceptual/Lexical Feature Model: Kroll & De Groot 1997）である。De Groot らは，まずL1語彙表象と概念表象との結びつきはL1使用によって強化されるのと同様に，L2語彙表象と概念表象との結びつきもL2使用によって強化されるとし，各語彙表象と概念表象との結びつきが強化されるほど概念を媒介とした翻訳がおこなわれるようになると主張する。ただし，概念媒介経路が確立されても，L2使用が少なくなるとその経路は消滅こそしないが，退化すると主張する。このような説明は，語彙表象と概念表象の間の連結強度を重視するという点において改訂階層モデルと一致するが，処理経路を可変的に捉えている点において異なる（羽渕，松見，2000）。

また，L1語とL2語の語彙項目の結びつきは，語彙の性質に大きく依存をすると主張される（e.g., De Groot, 1993; De Groot, Dannenbur & Van Hell, 1994; Van Hell & De Groot, 1998）。このことより De Groot は，語彙表象と分散された概念素性の仮定をおこない，２言語間において共有される概念特徴が多い単語ほど処理が速くなるとしている。この点において，このモデルは拡大活性化理論を背景とし，これまでの経路モデルとは異なる活性化の観点から言語処理を捉えている（羽渕，松見，2000）。このモデルによると，具象性効果は，具象語は抽象語に比べて具体的な指示対象物を有し，同じ形，大きさ等を言語間で共通に持つため，２言語間において概念的な要素をより多く共有するためであると説明される。一方，抽象語の場合，概念素性自体が具象語に比べて少なく，言語間での共有部分も具象語に比べて少ない。このモデルは，語の特性により，複合型バイリンガルや協応型バイリンガルの様相を持つため Mixed Model（De Groot, 1993; De Groot & Nas, 1991）とも呼ばれている。

しかし，このモデルの欠点としては翻訳の非対称性を説明ができないところにある（Finkberiner, Foster, Nicol, & Nakamura, 2004）。つまり，このモデルにおいては翻訳の方向性に限らず同数の共通な概念素性を有することになるため，ある一方向の翻訳において反応時間，またはプライミング効果に差が生じることの説明が不可能となる。この問題について，改訂版（the Distributed Lexical/Conceptual Feature Model: Kroll & De Groot, 1997）では，L2語彙ノードと概念との弱い結合によって，説明を加えている（図５参照）。

羽渕（2003）は，刺激語として具象性の観点から調査をおこない，具象語については改訂階層モデルで予測されるようにL1－L2翻訳は概念媒介仮説に沿った処理がなされ，L2－L1翻訳は語彙連結仮説に沿った処理がおこなわれる一方で，抽象語については改訂階層モデルで予測される結果とは異なり，L2熟達度が高い学習者であっても両翻訳方向において語彙連結仮説に沿った処理がなされるとしており，語彙の特性によって処理過程が異なることを示唆している。

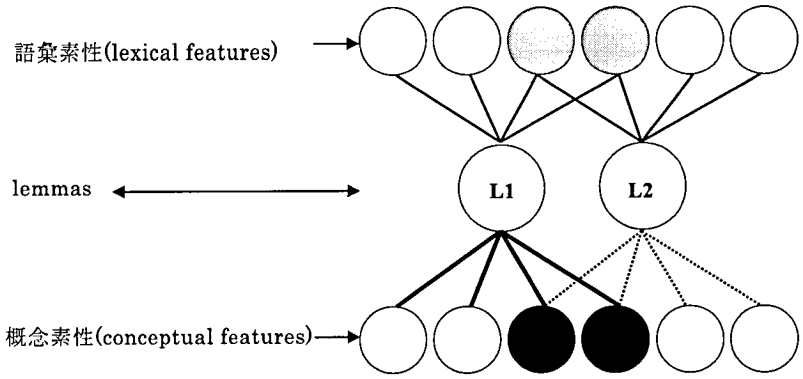

図5 分散概念素性モデル（Kroll & De Groot 1997に基づく）

3.3. 心理言語学的語彙習得モデル

上記の2つのバイリンガル心内辞書モデルが，心内辞書の表象に焦点を当てているのに対し，Jiangの提唱する心理言語学的語彙習得モデル（Pcycholinguistic Model of FL Vocabulary Acquisition: Jiang, 2000）は，L2語の習得段階におけるL2心内辞書構造の変容に焦点を当てている。

まず，前項までで概観した2つのモデルがそれぞれ1つの単語を1つの情報単位として扱うのに対し，Jiang（2000）は，L1研究におけるLevelt（1989）のモデルを基に，心内辞書内に語の意味と統語情報が保存されているlemmaと，形態素情報と形式的な語の形態（正書法と音韻）情報が保存されているlexemeの想定をおこない，L1とL2心内辞書内における各情報表象（形式，意味，統語，形態素）がどのような順に，どのような変容を経てL2心的辞書内に統合されるのかについて説明をおこなう。

このモデルによると，L2学習者は，以下の3つの段階を経るとされる（図6から図8参照）。まず，形式的段階においては，学習者の意識はL2語の形式的側面（書記的，音韻的情報）に当てられるため，L2心内辞書内には形式情報のみが存在し，これがL1の相当語に語彙連結にて接続されて概念と結びつく（図6参照）。この段階においては，意味，統語情報は，未だL2心内辞書内に統合されていない。そのため，この段階におけるL2言語理解および使用は，全て対応するL1翻訳語の活性化に依存している（cf. 語彙連結モデル：Potter, So, Von Eckardt & Feldman, 1984）。

その後，継続的にL2入力を受け活性化されることにより，L2形式とL1意味情報を結ぶ結合は強化され，L1意味，統語情報がL1心内辞書よりL2心内辞書へと転移される（L1 lemma coping，図7参照）。この段階におけるL2心内辞書表象としては，成人L2学習者に特有の構造としてL2形式情報とL1の意味，統語情報が混在した構造（hybrid-entry）を有する（Jiang, 2004a, cf., 改訂階層モデル：Kroll & Stewart, 1994）。その後，更なる入力に伴いL1の意味情報とL1統語情報がL2語に特有の情報へと変化をすることと，形態素情報がL2心内辞書表象内に形成されることにより全てのlemma，lexeme情報がL2辞書内に形成され，L1辞書構造と同一のものとなる（図8参照）。しかし，多くのL2語の場合，第2段階から第3段階へと発展することは困難なことが多く，いわゆる化石化が生じることとなる（Jiang, 2000）。

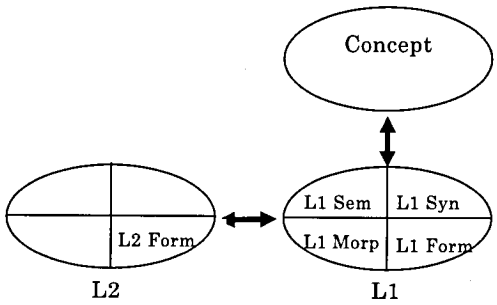

図6　形式的段階

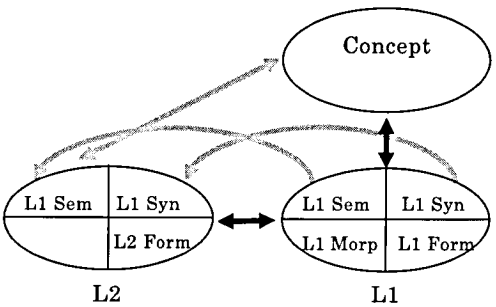

図7　L1 lemma 仲介段階

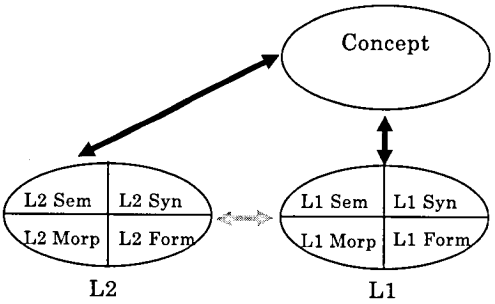

図8　L2統合段階

このモデルの特徴としては，以下の３点である。

(1) 概念と意味表象の区別をおこなったこと[6)]
(2) L1，L2心内辞書を語の持つ各情報要素（意味，形式，統語，形態素）に分けていること
(3) 心内辞書内の各情報要素の習得順序（acquisition order），発達の道筋（developmental sequence）を明らかとしたこと

これらの中でも，(3) に関して Jiang は意味転移仮説（Semantic Transfer Hypotheis）等の仮説を提唱している。このモデルはその後，Jiang の一連の研究（Jiang, 2002, 2004a, 2004b, 2004c）によって，それらの仮説の検証をおこなわれているが，さらにL1やL2習熟度の異なる被験者を対象に実験を行い交差妥当性の検証を行う必要があるため，より多くの研究によりこのモデルの検証がなされることが望まれる。

3.4. 第２言語語彙研究への応用

これらのバイリンガル研究におけるバイリンガル心内辞書研究においては，L2心内辞書構造についての解明をおこなうことが主目的とされてきた。理論的側面については心理学の理論を応用する試みが語彙研究において見られている一方，バイリンガル心内辞書研究におけるこれらの研究結果を現在の第２言語研究に応用しようとする試みは欠けている（Meara, 2002)。この中で

も，Meara（1993）は，バイリンガル心内辞書研究と語彙教授との関係について「バイリンガル心内辞書の研究は，教室において教授者が何をするべきかについて示唆を出すほどには，未だ発達をしていない（p.295）」と述べている。そのため，現在まで学習者の持つ心内辞書の表象を調査するバイリンガル研究と，教育的示唆を求める語彙研究との間に明らかな溝が見られ，心内辞書を応用した語彙研究は少ない（Jiang, 2000）。

これは，(1) バイリンガル心内辞書モデルに関する研究が，1990年代前半に出版をされたSchreuder and Weltens (1993) が基となっており，研究分野として未発達の研究分野であること，そして，(2) 心内辞書構造を解明する際に，符号化ではなく検索という側面からのアプローチをおこなうためである。特に後者に関しては，研究に用いられるテスト項目は多くが被験者にとって既知語を用いることが多く，いわゆる未知語の語彙学習という符合化の側面においてこれらのバイリンガル心内辞書モデルが用いられることは少ない（例外，Finkbeiner, & Nicol, 2003; Schneider, Healy, & Bourne, 2002）。

今後，特に符号化との関連において，これらのバイリンガル心内辞書モデルを基に研究をおこなうことにより，より語彙教授に示唆が求められることが期待される。

4．2つのアプローチの統合

上記において概観をおこなってきた2つの関連分野（心理学，バイリンガル研究）での理論およびモデルは以下の表1にまとめられる。これら2つのアプローチはどちらも記憶の3つの過程の中の貯蔵の解明を目的とはしているが，符合化と検索のどちらの側面からその解明を試みるのかによって異なる。

表1　第2言語語彙習得における理論およびモデル

理論 / モデル	符合化	貯　蔵	検　索	習得段階	語彙特性
心理学					
1. BDC theory	イメージ性	➡	—	—	具象性効果 イメージ性効果
2. LOP theory	3つの処理水準	➡	—	—	—
3. TAP model	符合化処理の種類	⬌	検索処理の種類	—	—
バイリンガル研究					
4. RH model	—	⬅	翻訳の不均衡 意味干渉効果	語彙連結から 概念媒介連結	—
5. DC/LF model	—	⬅	語特性による効果	—	具象性効果 同根語効果
6. Psycholinguistic model of FLVA	—	⬅	L1語の重要性	習得順序 発達の道筋	同一翻訳語効果

Note: BDC theory, Bilingual dual-coding theory; LOP theory, Level of processing theory; TAP theory, Transfer appropriate processing theory; RH model, Rivised hierachical model; DC/LF model, The distributed conceptual/lexical feature model; Psycholinguistic model of FLVA, Pcycholinguistic model of FL vocabulary acquisition

特に，バイリンガル二重符合化説と改訂階層モデルにおいては，どちらも概念表象を取り入れている点においてその共通点が多い。しかし，松見（1994）は，これら2つの理論の違いが

Kolers（1963）の分離モデルと共有モデルに端を発していると主張をしている。分離モデルが各言語の意味は異なる２つの言語に特有の記憶システムに貯蔵されているのに対し，共有モデルは２つの言語で表される意味でも，非言語的かつ抽象的な形式で１つの記憶システムに貯蔵されていることを仮定している。この考え方に立つと，バイリンガル二重符合化理論は分離説の流れをくみ，改訂階層モデルは共有説の流れを組むことになる（松見，1994)。また，どちらも貯蔵に焦点を当てているが，バイリンガル二重符合化理論が符号化からの側面で貯蔵の構造を解明しようとしているのに対し，改訂階層モデルは検索の側面よりのアプローチを取っている。このことについて，松見（1994）は，バイリンガル二重符合化理論は「単語記憶理論」であり，改訂階層モデルは「単語処理理論」であると区別をしている。

現在，語彙習得の符号化，貯蔵，検索という全ての段階を包括的に説明する理論，モデルは未だ確立されておらず，今後の関連分野の発展が望まれる。その際に，上記の２つのアプローチが統合される必要がある。

５．第２言語語彙研究における理論およびモデルの構築に向けて

現在，第２言語語彙研究においては，新たな研究課題の設定に必要なL2語彙習得における理論や，多くの研究結果を統合するための理論的枠組みが存在しておらず，L2語の学習においてどのように語の習得がなされるのかという発達段階を予測，説明をする理論や，習得過程を記述するモデルを欠いた状態である。

そこで，本論文においては，現在，心理学やバイリンガル研究等の関連分野において確立をされている理論やモデルの概観をおこない，それらの理論やモデルの特徴を概説し，さらに不足する側面，今後必要となる側面の考察をおこなった。以下では，今後，第２言語語彙研究において望まれる「理論とモデル」像をまとめる。

5.1. 語彙研究における理論

語彙研究における理論については，上記のように，心理学における符合化に関するバイリンガル二重符合化説および処理水準説が，近年，語彙の教授面において幾つかの応用がなされてきた。また，転移適切性処理に関しては，新たな理論として語彙研究へと応用がなされている。

今後，その第１段階として，教授法の記述的な比較研究として長らくおこなわれてきた現在の語彙研究がこれらの理論を援用することで，説明的，予測的な語彙習得研究へと発展することが望まれる。具体的には，現在のような教授法効果についての比較をおこなう場合には，ある特定の理論を援用し，その理論の予測を基に仮説検証という形でおこなわれることが望ましい。その際に，松見（2002）の「学習方法を考えるときは「誰が，何を，何のために」という視点が重要であり，「あらゆる条件下で有効な方法」はそもそも存在しえない（p.105)」という指摘が今後の教授法効果研究に示唆を与えてくれる。つまり，今後の語彙研究が，語彙習得研究として発展をしていくためには，まずは「どのような学習者が，どのような語を，どのような方法で覚えることが，どのようなテスト法を用いることで効果的であるのか」ということについて詳細に設定し，更に上記の理論の中から研究目的に沿った理論を用いて分析する必要がある。

また，SLA の理論を基に，第２言語語彙研究分野独自の理論やモデルを構築することが望まれる[7)]。上記の関連分野の理論やモデルを統合することにより，新たな第２言語語彙習得研究としての理論やモデル構築がなされる必要がある。

5.2. 語彙研究におけるモデル

一方，語彙習得段階の記述をおこなうモデル構築に関しては，バイリンガル心内辞書研究と教育的示唆を求める語彙研究との間に目的の違いによる溝が存在をするため，未だ応用をすることは難しい状態である。しかし，上記３つのバイリンガル心内辞書モデルの中でも，Jiang の心理言語学的語彙習得モデルが，教授後における心内辞書の変容に言及をおこなっているように，今後，心理言語学的語彙習得モデルの示す L2心内辞書内における習得順序，発達の道筋が語彙学習という符号化の側面より明らかとされる必要性がある。また，L2語彙教授においても，これらのモデルが応用可能であるのかについて検討をする必要性が指摘できる。

終わりに

現在の語彙研究に急務とされているのは第２言語語彙研究における理論およびモデル構築である。しかしながら，第２言語語彙習得は，様々な要素が複雑に絡み合う現象であり，上記のある特定の理論やモデルによって，全ての語彙習得という現象の説明および予測がなされることは不可能といえる。また，理論やモデルは研究を導く働きを持つものの，そのこと自体がすぐに指導の実践的な目的につながるわけではない（VanPatten & Williams, 2007)。

しかしながら，語彙研究が，語彙習得研究として語彙習得の解明をする際に，理論やモデルは必要となる。そのため，今後の研究分野の発展のための第１段階として必要なことは，研究目的（符合化・貯蔵・検索の側面, 語彙特性, 習得段階）に応じた理論やモデルを援用することであり，特に，どのように語彙が習得されるのかという発達の観点をモデルという形で解明する必要がある。その際には，語の発達段階に焦点を当て，その習得順序および発達の道筋について提案をおこなった心理言語学的語彙習得モデル（Jiang, 2000）が示唆を示すこととなると考えられる。

このような議論を通して，将来的に，第２言語語彙研究分野において，より多くの理論的な，またはモデルを基とした研究が語彙研究においてなされることが望まれる。

付記　本研究は，科学研究費補助金　若手（B）18720146　による研究成果の一部である。

注

1）この理論の問題点については，二谷（1999）を参照のこと。

2）また，Barcroft は SLA 研究におけるインプット処理（input processing: VanPatten, 1996）との関連より，語彙的インプット処理の重要性を示唆している（Barcroft, 2004c)。

3）現在までのバイリンガル心的辞書モデルの変遷については，Kroll and Tokowicz（2005）に詳しい。また，他にも L2語認知における形態表象の役割については，Dijkstra（2005)，Dijkstra and Van Heuven（2002）を参照のこと。

4）改訂階層モデルの四角は各語彙表象の大きさを示し，矢印は結合を示す。また，矢印の太さは表象間の結合強度を示す。

5）改訂階層モデルへの批判及び分散概念素性モデルに関しては，Kroll and De Groot（1997)，Kroll and Tokowicz（2001, 2005）を参照のこと。

6）概念と意味を区別する必要については，Paradis（1997)，Pavlenko（2000）により主張されているが，*Bilingualism: Language and Cognition 3* (1) の特集において未だ議論がなされている。

7）例えば，Haastrup and Henriksen（2001）は，特に近年 SLA 研究において用いられる

Focus on Form の概念を語彙研究においても使用するべきであると主張する。Focus on Form については，近年 Laufer が語彙研究への応用を試みており（e.g., Laufer, 2005a, 2005b），語彙研究独自の理論としては Meara により主張される Matrix model (Meara, 1989, 2004) がある。

参考文献

Altarriba, J., & Mathis, K. M. (1997). Conceptual and lexical development in second language acquisition. *Journal of Memory and Language 36*, 550-568.

Barcroft, J. (2002). Semantic and structural elaboration in L2 lexical acquisition. *Language Learning 52*, 323-363.

Barcroft, J. (2003). Effects of questions about word meaning during L2 Spanish lexical learning. *The Modern Language Journal 87*, 546-561.

Barcroft, J. (2004a). Effects of sentence writing in second language lexical acquisition. *Second Language Research 20*, 303-334.

Barcroft, J. (2004b). Theoretical and methodological issues in research on semantic and structural elaboration in lexical acquisition. In VanPatten, B., Williams, J., Rott, S., & Overstreet, M (Eds.), *Form-meaning connections in second language acquisition* (pp. 219-234). Mahwah, New Jersey: Lawrence Erlbaum Associates.

Barcroft, J. (2004c). Second language vocabulary acquisition: A lexical input processing approach. *Foreingn Language Annals 37*, 200-208.

Brown, T., & Perry, F. (1991). A comparison of three learning strategies for ESL vocabulary acquisition. *TESOL Quarterly 25*, 655-670.

Chen, H. C., & Leung, Y. S. (1989). Patterns of lexical processing in a nonnative language. *Journal of Experimental Psychology: Learning, Memory and Cognition 15*, 316-325.

Craik, F. I. M., & Lockhart, R. S. (1972). Levels of processing: A framework for memory research. *Journal of Verbal Learning and Verbal Behavior 11*, 671-684.

Craik, F. I. M., & Tulving, E. (1975). Depth of processing and the retention of words in episodic memory. *Journal of Experimental Psychology 104*, 268-294.

De Groot, A. M. B. (1993). Word-type effects in bilingual processing tasks: Support for a mixed-representational system. In R. Schreuder, & B. Weltens (Eds.), *The bilingual lexicon* (pp.27-51). Amsterdam: Benjamins.

De Groot, A. M. B., Dannenburg, L., & Van Hell, J. G. (1994). Forward and backward word translation by bilinguals. *Journal of Memory and Language 33*, 600-629.

De Groot, A. M. B., & Nas, G. L. J. (1991). Lexical representation of cognates and noncognates in compound bilinguals. *Journal of Memory and Language 30*, 90-123.

De Groot, A. M. B., & Poot, R. (1997). Word translation at three levels of proficiency in a second laguage: The ubiquitous involvement of conceptual memory. *Language Learning 47*, 215-264.

Dijkstra, A. (2005). Bilingual visual word recognition and lexical access. In J. F. Kroll, & A. M. B. De Groot (Eds.), *Handbook of bilingualism: Psycholinguistic approaches* (pp. 179-201). New York: Oxford University Press.

Dijkstra, A., & Van Heuven, W. J. B. (2002). The architecture of the bilingual word recognition

system: From identification to decision. *Bilingualism: Language and Cognition 5*, 175-197.

Ellis, N. (1995). Vocabulary acquisition: Psychological perspectives. *The Language Teacher 19*, 12-16.

Ferré, P., Sánchez-Casas, R., & Guasch, M. (2006). Can a horse be a donkey? Semantic and form interference effects in translation recognition in early and late proficient and nonproficient Spanish-Catalan bilinguals. *Language Learning 56*, 571-608.

Finkbeiner, M., Foster, K., Nicol, J., & Nakamura, K. (2004). The role of polysemy in masked semantic and translation priming. *Journal of Memory and Language 51*, 1-22.

Finkbeiner, M., & Nicol, J. (2003). Semantic category effects in second language word learning. *Applied Psycholinguistics 24*, 369-383.

Haastrup, K. & Henriksen, B. (2001). The interrelationship between vocabulary acquisition theory and general SLA research. In S. Foster-Cohen, & A. Nizegorodcew (Eds.), *EUROSLA Yearbook 1* (pp. 69-78). Amsterdam: John Benjamins.

Hulstijn, J. H., & Laufer, B. (2001). Some empirical evidence for the involvement load hypothesis in vocabulary acquisition. *Language Learning 51*, 539-558.

Jiang, N. (2000). Lexical representation and development in a second language. *Applied Linguistics 21*, 47-77.

Jiang, N. (2002). Form-meaning mapping in vocabulary acquisition in a second language. *Studies in Second Language Acquisition 24*, 617-637.

Jiang, N. (2004a). Semantic transfer and its implications for vocabulary teaching in a second language. *The Modern Language Journal 88*, 416-432.

Jiang, N. (2004b). Semantic transfer and development in adult L2 vocabulary acquisition. In P. Bogaards, & B. Laufer (Eds.), *Vocabulary in a second language: Selection, acquisition and testing* (pp. 191-208). Amsterdam: John Benjamins.

Jiang, N. (2004c). Morphological insensitivity in second language processing. *Applied Psycholinguistics 25*, 603-634.

Kroll, J. F., & De Groot, A. M. B. (1997). Lexical and conceptual memory in the bilingual: Mapping form to meaning in two languages.. In A. M. B. De Groot, & J. F. Kroll (Eds.), *Tutorials in bilingualism: Psycholinguistic perspectives* (pp. 169-199). Mahwah, NJ: Erlbaum.

Kroll, J. F., Michael, E., Tokowicz, N., & Dufour, R. (2002). The development of lexical fluency in a second language. *Second Language Research 18*, 137-171.

Kroll, J. F. & Stewart, E. (1994). Category interference in translation and picture naming: Evidence for asymmetric connections between bilingual memory representations. *Journal of Memory and Language 33*, 149-174.

Kroll, J. F., & Tokowicz, N. (2001). The development of conceptual representation for words in a second language. In J. L. Nicol, & T. Langedoen (Eds.), *One mind, two languages: Bilingual language processing* (pp. 49-71). Cambridge, MA: Blackwell.

Kroll, J. F., & Tokowicz, N. (2005). Models and bilingual representation and processing: Looking back and to the future. In J. F. Kroll, & A. M. B. De Groot (Eds.), *Handbook of bilingualism: Psycholinguistic approaches* (pp. 531-553). New York: Oxford University Press.

Laufer, B. (2005a). Focus on form in second language vocabulary learning. In S. H., Foster-Cohen, M. García-Mayo, & J. Cenoz (Eds.), *EUROSLA Yearbook 5* (pp. 223-250). Amsterdam: John Benjamins Publishing.

Laufer, B. (2005b). Instructed second langage vocabulary learning: The fault in the "default hypothesis". In A. Housen, & M. Pierrard (Eds.), *Investigations in instructed second language acquisition* (pp. 286-303). Berlin: Mouton de Gruyter.

Laufer, B., & Hulstijn, J. (2001). Incidental vocabulary acquisition in a second language: The construct of task-induced involvement. *Applied Linguistics 22*, 1-26.

Levelt, W. J. M. (1989). *Speaking: From intention to articulation.* MA: MIT Press.

Meara, P. (1980). Vocabulary acquisition: A neglected aspect of language learning. *Language Teaching and Linguistics: Abstracts 13*, 221-246.

Meara, P. (1989). Matrix model of vocabulary acquisition. *AILA Review 6*, 66-74.

Meara, P. (1993). The bilingual lexicon and the teaching of vocabulary. In R. Schreuder, & B. Weltens (Eds.), *The bilingual lexicon* (pp. 279-297). Amsterdam: Benjamins.

Meara, P. (1996). The dimensions of lexical competence. In G. Brown, K. Malmkjaer, & J. Williams (Eds.), *Performance and competence in second language acquisition* (pp. 35-53). Cambridge: Cambridge University Press.

Meara, P. (1997). Toward a new approach to modeling vocabulary acquisition. In N. Schmitt, & M. McCarthy (Eds.), *Vocabulary: Description, acquisition and pedagogy* (pp. 109-122). Cambridge: Cambridge University Press.

Meara, P. (2002). The rediscovery of vocabulary. *Second Language Research 18*, 393-407.

Meara, P. (2004). Modeling vocabulary loss. *Applied Linguistics 25*, 137-155.

Morris, C. D., Bransford, J. D., & Franks, J. J. (1977). Levels of processing versus transfer appropriate processing. *Journal of Verbal Learning and Verbal Behavior 16*, 519-533.

Nation, I. S. P. (1982). Beginning to learn foreign vocabulary: A review of the research. *RELC Journal 13*, 14-36.

Paivio, A., & Desrochers, A. (1980). A dual coding approach to bilingual memory. *Canadian Journal of Psychology 34*, 390-401.

Paradis, M. (1997). The cognitive neuropsychology of bilingualism. In A. M. B. De Groot, & J. F. Kroll (Eds.), *Tutorials in bilingualism: Psycholinguistic perspectives* (pp. 331-354). Mahwah, NJ: Erlbaum.

Pavlenko, A. (2000). New approaches to concepts in bilingual memory. *Bilingualism: Language and Cognition 3*(1), 1-4.

Potter, M. C., So, K.-F., Von Eckardt, B., & Feldman, L. B. (1984). Lexical and conceptual representation in beginning and more proficient bilinguals. *Journal of Verbal Learning and Verbal Behavior 23*, 23-38.

Schmitt, N. (1995). The word on words: An interview with Paul Nation. *The Language Teacher 19*(2), 5-8.

Schneider, V. I., Hearly, A. F., & Boune, L. E. Jr (2002). What is learned under difficult conditions is hard to forget: Contextual interference effects in foreign vocabulary acquisition,

retention, and transfer. *Journal of Memory and Language 46*, 419-440.

Schreuder, R. & Weltens, B. (1993). *The bilingual lexicon*. Amsterdam: John Benjamins.

Sholl, A., Sankaranarayanan, A., & Kroll, J. F. (1995). Transfer between picture naming and translation: A test of asymmetries in bilingual memory. *Psychological Science 6*, 45-49.

Talamas, A., Kroll, J. F., & Dufour, R. (1999). From form to meaning: Stages in the acquisition of second language vocabulary. *Bilingualism: Language and Cognition 2*(1), 45-58.

Van Hell, J. G., & Candia Mahn, A. (1997). Keyword mnemonics versus rote rehearsal: Learning concrete and abstract foreign words by experienced and inexperienced learners. *Language Learning 47*, 507-546.

Van Hell, J. G., & De Groot, A. M. B. (1998). Conceptual representation in bilingual memory: Effects of concreteness and cognate status in word association. *Bilingualism: Language and Cognition 1*, 193-211.

VanPatten, B. (1996). *Input processing and grammar instruction: Theory and research*. Norwood, NJ: Ablex.

VanPatten, B. & Williams, J. (2007). Introduction: The nature of theories. In B. VanPatten, & J. Williams (Eds.), *Theories in second language acquisition* (pp. 1-16). Mahwah, NJ: Lawrence Erlbaum Associates.

川上綾子（1994）.「語彙ー概念関係における第二言語の習熟度の影響」.『心理学研究』*64*, 426-433.

羽渕由子（2003）.「上級の第２言語学習者における単語の翻訳処理過程—日本語ー英語間での改訂階層モデルの検討—」.『教育心理学研究』*51*, 65-75.

羽渕由子，松見法男（2000）.「第２言語の単語処理モデルの動向」.『広島大学教育学部紀要　第二部』*49*, 171-177.

二谷廣二（1999）.『教え方が「かわる・わかる」 認知心理学の動向から』東京：学芸図書.

松見法男(1994).「第２言語の単語記憶研究の展望」.『広島大学教育学部紀要　第一部(心理学)』*43*, 63-70.

松見法男(2001).「第二言語の習得—第二言語の認知過程をのぞいてみよう—」森　敏昭(編)『おもしろ言語のラボラトリー』(pp. 195-219). 京都：北大路書房.

松見法男（2002）.「第二言語の語彙を習得する」. 海保博之，柏崎秀子（編）『日本語教育のための心理学』(pp. 97-110). 東京：新曜社.

松見法男，邱學瑾，桑原陽子（2006）.「第２節　語彙の習得」迫田久美子（編），『講座　日本語教育学　第３巻　言語学習の心理』(pp. 161-183). スリーエーネットワーク.

ABSTRACT

Exploring the Theory and Models for Second Language Vocabulary: A Research Agenda for Second Language Vocabulary "Acquisition" Research

Kenji TAGASHIRA
Institute for Foreign Language Research and Education
Hiroshima University

We are currently experiencing an explosion in the amount of SLA research dealing with pedagogical issues related to second language (L2) vocabulary learning and teaching. The results of recent studies on L2 vocabulary provide us with many fruitful suggestions for L2 pedagogy. It, however, seems fair to say that the majority of this research focuses on determining the most effective vocabulary teaching methods. On the other hand, model-driven studies for the obtained data have received far less attention. Also, little is known about why one method is superior to another, or how L2 words are integrated in the process of L2 vocabulary acquisition. Overall, few researchers use theories or models proposed in related fields (psychology, bilingual studies) to explain the reasons for their findings.

This is partly due to the fact that theories or models in L2 vocabulary have only recently come into their own and still have a long way to go. What is needed is model-building, which can help generate new research questions and offer a conceptual framework for integrating numerous existing research findings in a coherent way.

To gain further information about this issue, the paper presents an overview of the past literature on the theories and models in psychology and bilingual research, providing some suggestions for future advancements in the field of L2 vocabulary acquisition research.